

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 1 日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21592831

研究課題名（和文）子どもの発達特性により日常生活で困り感をもつ母親を支援するシステムの開発

研究課題名（英文）Development of a support system in the community for mothers of children with development disorder

研究代表者

木戸 久美子（KIDO KUMIKO）

山口県立大学・看護栄養学部・准教授

研究者番号：40269080

研究成果の概要（和文）：

本研究の結果から発達障害児および発達障害が疑われる児の母親育では育児を行う上での日常生活上の困難感により、精神的には抑鬱傾向を示すケースが少なからず存在することが明らかになった。母親は子どもの発達を促す上で大きな影響を与える存在でもあり、母親を支えるシステムの重要性が認識できた。発達障害児及び発達障害が疑われる母親に、精神面の安定につながるような介入的サポートを行うことで、母親の育児不安が軽減され子どもの発達にとっても促進的な影響を与えることにつながることを期待できる。

研究成果の概要（英文）：

According to this survey, mothers of children with children with development disorder shows that the mothers suffer from depression and mental distresses. The difficulties in raising autistic children lead to the mothers having poor mental health. We think that mothers are a very important influence on the environment of their children and we believe that the mental well-being of the mothers are directly related to the stability of the emotional state of their children. We expect that the emotional stabilization of the children will promote their development. Both the therapeutic and educational approaches for children with development disorder are useful for their developmental support. Also we leded supporting the mothers in caring for their children by intervening in their child-raising environments have a positive effect on the developmental support for the children with development disorder.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	300,000	90,000	390,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野： 臨床看護学

科研費の分科・細目：生涯発達看護学

キーワード：発達障害，自閉症スペクトラム，育児困難観，CBCL，CES-D，育児支援

1. 研究開始当初の背景

本邦では乳幼児期にある子どもをもつ母親の育児ストレスや育児不安の調査及び育児支援のあり方についての研究成果はこれまでにいくつか報告されている（橋本ら，2008、富岡ら，2005）ものの、発達障害児および発達障害が疑われる子どもをもつ母親に対する育児支援ニーズの調査や育児支援のあり方についての報告は少ない（庄司，2007）。子どもの発達特性が特異である場合、通常の育児では上手く子どもに接することができず母親達は育児困難感を感じ、孤立するとネグレクトや虐待に結びつくものが少なくない（東，2008）。最近では母親たちが乳児期から自分の居住する地域にある育児サークルに通い、母親同士の交流を深め、育児不安を解消し、育児技術を身につけることが多いが、発達障害児および発達障害が疑われる子どもをもつ母親では、一般の育児サークルに通うことで他の子どもと比較して自分の子どもの発達の特異さが目につき不安が増す可能性もある。また、最近では子どもの発達の遅れを指摘されることを避けるために乳児健診を受診しない親もいることなどが雑誌やメディアに取り上げられ、本来の発達相談窓口である母子保健に関する行政機関が機能しきれていない現状もうかがえ、発達に関する専門機関が母親達にとって身近な存在ではないことが推察できる。病院などの医療機関ではなく、発達障害児および発達障害が疑われる子どもをもつ母親が、子どもの発達に関する相談や育児上の不安、日常生活上の困り感について気軽に相談でき、さらに必要時専門機関へ繋いでもらえるような地域システムがあれば母親達が不安を

抱え孤立することはないと考えた。本邦ではこのような発達障害児および発達障害が疑われる子どもをもつ母親への地域における育児支援のモデルとなる事業に関する報告が見当たらない。

2. 研究の目的

本研究は、発達障害児および発達障害が疑われる子どもをもつ母親が育児について日頃感じる生活上の気がかりと育児に対する精神的負担感の程度、さらに子どもの行動特性との関連を明らかにし、地域で母親を支援する具体的な方略を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

研究対象者は、発達障害児の親の会および山口県内で発達外来を担当している医師を通して、選定した。研究への参加は、山口県立大学倫理委員会で承認を得た後に、研究方法や内容について対象者に文書を用いて説明し、研究主旨に賛同し同意書の得られた母親に依頼した。発達障害児および発達障害が疑われる子どもをもつ母親が育児について日頃感じる生活上の気がかりを把握するために発達障害診断のある子どもをもつ母親13人（幼児期群8人、学童期（思春期含む）群5人）に半構造化面接による調査を行った。その後、子どもの行動特徴を把握するために、面接調査とは別に合計86人の母親から子どもの行動特徴について記入したChild Behavior Checklist（以下CBCL）のデータを収集した。面接調査対象者およびCBCL記入依頼対象者の両方に精神的負担感の程度を測定する尺度として、抑鬱傾向を測定する

The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (以下 CES-D) の記入を依頼しデータを収集した。

面接内容は IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した後に、テキストデータについてテキストマイニングソフト (数理システム) を用いて分析を行った。テキストマイニングソフトを使用して、分かち書き分析した後に単語頻度解析を行った。単語頻度解析によりテキストデータに出現する単語の出現回数をカウントし、頻出する単語を分類した。次いで、頻出した単語の共起関係分析を行った。共起関係分析の結果解釈にあたり、相互に関連のある言葉がどのような文脈の中で用いられているかについては、原文検索を行い分析した。量的データの統計解析には SPSSVer16.0~19.0 を使用した。CES-D と CBCL 各行動特徴の項目については Spearman の相関係数 (ρ) を求めた。また、CES-D を従属変数、CBCL の各項目を独立変数として重回帰分析を行った。すべての有意水準は 5%未満とした。

上記のデータを収集すると同時に、地域に居住している母親を対象とした子どもの発達に関する講演会や育児相談を研究代表者および研究分担者 (発達障害専門医等) で実施した。

4. 研究成果

(1) 発達障害児および発達障害が疑われる子どもをもつ母親が育児について日頃感じる生活上の気かりと育児に対する精神的負担感の程度

面接調査の対象の子どもの診断名は幼児期群と学童期 (思春期含む) 群ともに最も多かったのは自閉症 (自閉症スペクトラム) だった。診断を受けた年齢は 1 歳半から 3 歳で、性別は男児が多かった。幼児期群の母親の

年齢中央値は 37 歳、学童期群の母親の年齢中央値は 40 歳で、母親の年齢は 2 群間で有意差を認めた ($Z=-1.68, p=0.092$)。幼児期群の子どもの年齢中央値は 4 歳、学童期群の子どもの年齢中央値は 10 歳で、学童期群の子どもは主として小学校中学年~高学年であった。

母親の CES-D 値の結果は、幼児期の母親では学童期 (思春期) 群と比較して高度抑鬱の範疇にある者の割合が多い傾向を認め、学童期 (思春期含む) 群の母親では正常の範疇にある者が幼児期群の母親よりも少なく軽度抑鬱の範疇にある者が多い傾向が認められた ($0.05 < p < 0.1$)。幼児期群の母親と学童期 (思春期含む) 群の母親別に軽度抑鬱~高度抑鬱の範疇にある者を抑鬱の範疇にある者とし、正常の範疇にある者との 2 群で母親および子どもの年齢差を検定した結果、学童期 (思春期含む) 群では母親の年齢および子どもの年齢に有意差を認めなかったが、幼児期群で、抑鬱の範疇にある者の子どもの年齢中央値が 3 歳であり正常の範疇にある者の子どもの年齢中央値 5 歳と比較して低い傾向を認めた ($0.05 < p < 0.1$)。この時期は障害診断を受けて間もない時期に相当するものと推察できる。

単語頻度解析で、幼児期群にとって今一番気がかりなこととして、「子ども」、「幼稚園」、「小学校」という単語が多く抽出された。学童期 (思春期含む) 群にとって今一番気がかりなこととして、「周りの人」「しつこい」「危害」といった単語が多く抽出された。共起関係分析の結果、幼児期の母親にとって今一番気がかりなことは、近い将来の就園や就学に関することであった。今はデイサービスや言葉の教室などに通っており、その先生にも理解してもらっており問題はないが、幼稚園や小学校に行って集団生活が営めるか

を心配していた。さらに育児に関する情報が少なく相談窓口が少ない、夫の子どもの障害に対する自分との認識の違いがあり相談相手にならないとも思っていた。学童期(思春期含む)群にとって今一番気がかりなことは言葉が出ず、すぐに手が出ることによって周囲の人に危害を加えるのではないかということだった。また、学校の教員にソーシャルスキルトレーニングをして欲しいとも思っていた。デイサービスの利用は、子どもの余暇活動の一環としてメリットを感じているが、支援者の専門性には疑問をもっていた。支援者の専門性に疑問をもつ理由として考えられることとして、支援者の行うアドバイスが母親の行う現状の育児とマッチしておらず、適切なアドバイスになっていないために支援者の専門性に疑問を抱く結果になっていると考えた。

子どもの発達を促すために環境要因として多大なる影響力をもつ母親の精神面の健康状態を保つためには、児の障害診断を受ける時期に集中的な支えが必要であり、母親の望む支援とは、自らが思考錯誤しながら行っている育児について肯定されることが何よりも重要で、子どもの将来については、家族員(夫や同居家族および親族)の価値観が異なる場合には相談することもできない場合もあるため、母親が望む適切な情報提供ができるニュートラルな立場にある専門家の存在が求められていると推察した。

(2) 児の行動特性と母親の精神面の健康状態との関係

対象者は、すべて自閉症(自閉症スペクトラム)児の母親であった。児の性別は男子 66 人(76.7%)、女子 12 人(23.3%)だった。母親の平均年齢は 40.3 ± 5.4 (95%CI : 39.0 ± 41.5) 歳、児の平均年齢は 9.3 ± 4.2 (95%

CI : 8.3 ± 10.2) 歳だった。CES-D の結果は、平均 16.9 ± 9.2 であり、その内訳は、正常 45 人(52.3%)、軽度抑鬱 15 人(17.4%)、中等度抑鬱 10 人(11.6%)、高度抑鬱 16 人(18.6%)だった。CBCL の T 得点については、内向 T 得点の平均は 66.0 ± 9.4 (45-94)、外向 T 得点の平均は 64.7 ± 8.6 (42-87)、総得点の T 得点平均は 68.5 ± 8.2 (46-90) だった。その内訳は、正常 32 人(37.2%)、境界域 12 人(14.0%)、臨床域 42 人(48.8%) だった。子どもの年齢と CES-D の相関係数は $\rho = 0.034$ ($p=0.76$) であった。CBCL の結果と CES-D の相関係数を表 1 に示す。子どもの年齢から前思春期(12 歳まで)65 人と思春期~(13 歳以降)19 人とに分け、CES-D の結果を集計したところ、前思春期では正常が 35 人(53.8%)、軽度抑鬱以上が 30 人(46.2%)、思春期~では正常が 9 人(47.4%)、軽度抑鬱以上が 10 人(52.6%) であった。

表 1 CBCL と CES-D の相関関係について
CES-D 値と CBCL II 「身体的な問題」および V 「思考の問題」以外の多くの項目とに相関関係を認めた。CES-D 値を予測する CBCL の項目について重回帰分析を行った結果を表 2 に示す。「その他の問題」が $\beta = 0.319$ ($p=0.024$) 有意であった。子どもの発達年齢別にみると学童期の子どもでは CES-D 値を予測する有意な CBCL の項目は認められず、思春期以降の子どもでは「CBCL II (身体的な訴え)」($\beta = -0.521$) のみが母親の CES-D 値を予測する要因として影響していた。

(3) 地域に居住している母親を対象とした子どもの発達に関する講演会や育児相談の実際

研究分担者(発達障害専門医師)および研究代表者によって地域に居住している母親を対象とした子どもの発達に関する講演会

や育児相談事業を行った。寄せられた相談者の子どもの障害は対人相互反応の質的障害に相当する内容が多く、自閉症スペクトラム児の母親は育児不安に陥りやすいことが推察できた。子どもの発達年齢に応じてこれまでの面接調査等で得られた結果と同様の相談が寄せられた。相談の際には、母親の現状の育児を時間をかけて傾聴し、その実際を詳しく聞いた上で母親の育児を肯定することで母親は安定した表情になることがわかった。また、医療機関ではないということもあって気軽に相談できると感じていることがわかった。子どもの行動特性が特異であり、どのように解釈してよいかわからず手探り状態で育児をしているために不安な状態に陥り精神的にも追い詰められ抑鬱的な状態になる可能性があり、専門家の目を通して母親が理解できるように子どもの行動の解釈を伝えた。子どもの発達を促進するためには、母親の現状の育児を肯定し、家庭で子どもに接するときには、療育的な視点は必要なく、子どもが安心して過ごせる環境を用意することが何より重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

- ①藤本美由紀, 木戸久美子, 子育てと仕事の両面に影響する要因-子育て期に就業経験のある女性への面接データの分析から-, 母性衛生, 査読有, 51(4), 2011, P704-710
- ②林 隆, 発達障害と非行につながる逸脱行動「医療サイドから見えること」, LD研究, 査読無, 20(1), 2011, P39-42
- ③木戸久美子, 林 隆, 藤田久美, 自閉症スペクトラム児の行動特性と母親の精神面の健康状態との関係 CBCL を用いた行動分析の結果から, 査読無, 日本発達障害学会研究大会発表論文集 46 回, 2011, P240-241
- ④藤田久美, 木戸久美子, 林 隆, 発達障害支援における母親支援に特化したサロン活動の意義と課題, 査読無, 2011, P186-187
- ⑤林 隆, 知的障害, チャイルドヘルス, 査読無, 13(5), 2010, P323-327

〔学会発表〕(計14件)

- ①木戸久美子, 林 隆, 自閉症スペクトラム児の行動特性と母親の精神面の健康状態との関係, 平成 23 年度山口県小児保健研究会, 2011 年 10 月 16 日
- ②木戸久美子, 林 隆, 自閉症スペクトラム児の行動特性と母親の精神面の健康状態との関係, 第 58 回日本小児保健学会, 2011 年 9 月 3 日
- ③藤田久美, 木戸久美子, 林 隆, 発達障害支援における母親支援に特化したサロン活動の意義と課題, 日本発達障害学会第 46 回研究大会, 2011 年 8 月 21 日
- ④木戸久美子, 林 隆, 藤田久美, 自閉症スペクトラム児の行動特性と母親の精神面の健康状態との関係-CBCL を用いた行動分析の結果から-, 日本発達障害学会第 46 回研究大会, 2011 年 8 月 21 日
- ⑤木戸久美子, 林 隆, 思春期にある自閉症スペクトラム児の行動特性と母親の精神面の健康状態との関係, 第 7 回中国思春期学会, 2011 年 7 月 2 日
- ⑥木戸久美子, 内山和美, 発達障害のある子どもの母親のめんたるヘルスに影響しているものとは?, 一般社団法人日本助産学会第 1 回(第 25 回)学術集会, 2011 年 3 月 5 日
- ⑦木戸久美子, 林 隆, 発達障害児及び発達障害が疑われる子をもつ母親を対象とした育児支援ニーズに関する研究-幼児期にある子どもの母親のインタビューによる分析-, 第 57 回日本小児保健学会, 2010 年 9 月 17 日
- ⑧木戸久美子, 林 隆, 藤田久美, 発達障

害児をもつ母親の育児に対する気がかりや精神的負担に関する研究-幼児期の子どもの母親と学童期にある子どもの母親の比較-, 平成 22 年度山口県小児保健研究会, 2010 年 9 月 12 日

⑨木戸久美子, 林 隆, 発達障害児をもつ母親の育児に対する気がかりや精神的負担に関する研究-思春期の子どもの母親と幼児期にある子どもの母親の比較より-, 第 6 回中国四国思春期学会学術集会, 2010 年 7 月 3 日

⑩林 隆, 木戸久美子, 稲垣真澄, 二次元尺度を用いた行動解析による ADHD 児に対する感覚統合訓練の有効性の評価, 第 52 回日本小児神経学会, 2010 年 5 月 20 日

⑪木戸久美子, 林 隆, 地域の育児支援者達が認識する乳幼児期の「ちょっと気になる子」をもつ母親の支援, 平成 21 年度山口県小児保健研究会, 2009 年 11 月 3 日

⑫木戸久美子, 育児支援を行なっている支援者達が認識する発達障害あ疑われる子をもつ母親への支援ニーズに関する研究, 第 35 回一般社団法人日本看護研究学会学術集会, 2009 年 8 月 4 日

⑬林 隆, 木戸久美子他, ADHD の行動改善策の開発と有効性評価-対象児の向き合いに着目した二次元尺度を用いた ADHD 児の行動分析-, 日本発達障害学会第 44 回研究大会, 2009 年 8 月 1 日

⑭木戸久美子, 林 隆, 乳幼児期の「ちょっと気になる子」をもつ母親の支援に関する研究-地域で育児支援を行なっている支援者達が認識する母親支援とは-, 日本発達障害学会第 44 回研究大会, 2009 年 8 月 1 日

[図書] (計 5 件)

①林 隆, 小児神経学の進歩, 第 40 集, 障害のある子どもを持つ親・保護者支援の実

際, 診断と治療社, 2011

②林 隆, 小野次郎, 小枝達也, 別冊「発達」ADHD の理解と支援, 「小児科的二次障害」, ミネルヴァ出版, 2011

③林 隆, 子育てハンドブック「高機能自閉症と ADHD」, 日本小児医事出版, 2011

④林 隆, 子育て支援ハンドブックチェック版, 「高機能自閉症と ADHD を診断するための行動チェックリスト」, 日本小児医事出版, 2011

⑤藤田久美, 林 隆他, 障害のある子どもの保育実践, 学文社, 2010

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木戸 久美子 (KIDO KUMIKO)

山口県立大学・看護栄養学部・准教授

研究者番号: 40269080

(2) 研究分担者

林 隆 (HAYASHI TAKASHI)

山口県立大学・看護栄養学部・教授

研究者番号: 20253148

藤田 久美 (FUJITA KUMI)

山口県立大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号: 40364129